
満月の夜

サリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月の夜

【著者名】

N4034E

【作者名】

サリー

【あらすじ】

10歳の時、施設の前で倒れていたアヤカには、その前の記憶が全く無かつた。成長したアヤカが知った真実とは！？

第1話（前書き）

始めまして、サリーです。初めての作品ですがよろしくお願ひします。軽い性的な描写や暴力的な場面もありますが、苦情はお受けしません。ご了承下さい。

第1話

「バンッ！バンッ！バンッ！」

ピストルを発砲する音が暗闇の中に奇妙に良く響いた。

そしてその音はすぐに悲鳴にかわる。

「いやーー！お父さんーー！お父さんーー！いやよーー死なないでーー！私を一人にしないでーー！」

『逃げ切れたと思ったのにー・どうしてー』 悲しみと悔しさ、絶望が少女を襲つた。

「逃げるんだ！おまえは逃げるんだ！」男は力の限り少女に訴えている。

「おまえは生きるんだ！母さんの為にも…お前は…生きてくれ…」

「おまえに言わなければならない事が…母さんは…生きてるんだ…」

男の声はもうすでに力を失っていた。

その目はもう何も見えていないかのように光をなくしていた。

「お父さんーーどうこうことなのーー？お母さんが生きてるのーー？」

「す…ま…な…い…リサ…」

最後の父の言葉だった。

少女はわかっていた。背後から父を殺した人物が一人を見ている事を。

『私も殺されるのだろう。』

少女は不思議だった。自分が殺されると分かつていながらも恐怖を感じなかつた。

父を失つたという悲しみと、自分にはもう頼る人は誰もいないという絶望からなのか、不思議に冷静でいた。

夜空には満月が少女を見守つていてるように輝いていた。『きれい…』 そんなことさえ考えていた。

そして少女は立ち上がりゆっくりと振り向いた。

第1話（後書き）

読んで下さり有難うござります。頑張って更新しますので、応援をよろしくお願いします。

第2話

朝の光がカーテンの隙間から差し込んできた。

「うう～ん」光が女の顔にかかる。そこには田を見張るような美しい顔があった。

女の名前は春日アヤカ、ハーフとも取れるような美貌で、髪は長く自然に緩くカールしていた。年齢は25歳。

女は目を覚ましたにも拘らず、中々ベットから出ようとはしなかった。

「頭痛い～やつぱり昨夜は飲みすぎたわ…でも、もうそろそろ起きないと…」。

時計の針は6時30分を指していた。

女は熱いシャワーを浴びる為、バスルームへと向かった。

『由美つたら、だからあれほど言つたのに…あの男は絶対駄目だつて分かっていたわ』

西垣由美はアヤカの唯一の友達であり、家族のような存在でもあった。年齢はアヤカと同じ25歳。容姿はアヤカほどではないが、由美もそこそここの美人である。その由美から昨日電話があった。

「アヤカ！聞いて！！和也つたらね、他に女がいたの！信じられる！？もうやつてられないわ！！アヤカ、今夜はジャックに来てね！」そしてアヤカの都合も聞かずに由美からの電話は一方的に切られたのである。

『ジャック』はアヤカと由美のお気に入りのバーである。とくに由美はそのオーナーがお気に入り。店はカウンター席が十席ほどの小さな店だが、ごちやごちやした感じが全く無く、モダンでシンプルな造りになっていた。オーナーのセンスが伺える。

オーナーは年齢など聞いた事はないが30歳前半くらいだろう、容姿はモデルだと言つても誰も疑わない。そのくせ体つきはがっしりとした感じである。そしていつも無口で、話かけるとたまに見せる

笑顔はハツとするほど素敵だが、なぜかアヤカにはその笑顔の裏には影があるように思えた。

そのジャックで昨晩は由美に付き合つて飲んだのである。やけくなつてている由美に付き合つたのだ、飲みすぎても無理はない。熱いシャワーを浴びて大分すつきりしたアヤカは、コーヒーを入れ飲みほした後、髪を乾かしてから軽くメイクをし、着替えて仕事へ向かった。

アヤカは電車で二駅ほどの所にあるデパートのおもちゃ売り場で働いている。アヤカは子供が大好きだ。そしておもちゃ売り場にはよく家族づれのお客さんがある。親が子供を見て幸せそうな顔をする。そして子供もまた親を見て幸せそうな笑顔を向けるのだ。アヤカはそんな姿を見るのが大好きだった。なんだかこちらまで幸せな気分になれる。

アヤカには家族はいない。アヤカは施設で育てられた孤児だ。10歳の頃施設の前で倒れていた所を助けられた。それからアヤカは三日間眠りっぱなしになったそうだ。アヤカにはその前の記憶はない。医者はひどいショックの為の記憶喪失だと言い、記憶は戻るかどうか判断が出来ないと言つたそうだ。

アヤカの素性を調べる手がかりが何もなかつた為、アヤカは高校を卒業するまでそこで住んでいた。施設での暮らしは他の子供に比べれば不便な事はあるかもしねないが、アヤカは不満を持つた事は一度もなかつた。そこで一緒に住んでいた、いわゆる母親がわりである先生達は皆とても良くしてくれたと思う。特に院長である斎藤和美先生は本当に優しくしてくれた。和美先生はアヤカが施設に居た最後の年に、40歳になつたばかりだった。和美先生は独身だった。アヤカは和美先生とたまに行くショッピングが大好きだった。もちろん施設での生活で嫌な事もあつたが、そんなことは小さな事に思えた。記憶のないアヤカに名前をつけてくれたのも和美先生だった。だがアヤカが大きくなるにつれ、その美貌のせいで随分大変な思いをするようになってきた。施設には30人近くの子供達が住んでい

たが、もちろん女の子ばかりではなく男の子も住んでいた。部屋こそ違うものの、一つ屋根の下に住んでいるのだ。年頃になるとアヤカを取り合う男の子達のいざこざが絶えなくなってきた。その事は先生たちの頭を痛めるのには十分な出来事だった。ある時決定的な事件が起きた。いつものようにいざこざを起こしていた男の子達のケンカがエスカレートし、止めに入った先生を誰かが思いつき殴つて大怪我を負わせてしまったのだ。そしてアヤカは決心した。『ここを出て行こう… それしかない』。そしてアヤカは置手紙を残し、8年間お世話になったこの家を出て行ったのだ。

もともと孤児だったアヤカを探す者は誰もいなかつた。ただ、和美先生の事だけは心が痛んだ。

行く場所がなかつたアヤカは、高校で知り合つた親友を頼つて行つた。その親友は理由があつてすでに一人暮らしをしていたのもあつて、アヤカの突然の押しかけにも嫌な顔一つせずに迎えてくれた。そして好きなだけここに居ればいいとまで言ってくれた。それが由美であつた。アヤカはすぐに仕事を探し必死な思いでお金を貯めていった。そして2年間由美の所で世話になり、大分貯金も出来たアヤカはようやくアパートを借りる事ができた。

アヤカにとつては初めての自分だけの世界だつた。

その日はなぜかとても忙しかった。こんなに一日に沢山の人がおもちゃを買うの？と驚くほどだった。アヤカがこの「デパートのおもちゃ売り場で勤め始めたもう3年になるが、クリスマスでもないのにこれほど忙しいのは滅多に無かった。

「今日は凄いね。おもちゃ売り場がクリスマス前でもないのにこんなに混雑した事つてあつたつけ？」と男がアヤカに話しかけてきた。男の名前は神崎信一といい、2年前からアヤカの同僚である。歳はアヤカより一つ上の27歳だ。背が高く切れ長のその目はとても綺麗だと女でも思う。アヤカは神崎がなぜおもちゃ売り場なんかに勤めているのか不思議でならなかつた。デパートの中にはいくつもの店があるが、神崎はあえておもちゃ売り場を希望してきたと聞いた事がある。

神崎はいつもアヤカにやさしい。同じ職場の同僚達に時々嫌味を言われるくらいだ。「美人は得よね~、どんな男にもチヤホヤされるのだから~、ほんつと鼻にかけて嫌ね~！！」鼻にかけてなんていらない、反対にアスカはこの容姿が時々嫌になる。女達には嫌味を言われ、男達は見た目だけで近寄つて来て下心丸見えなのだ。もう嫌になる。美人が得だとは限らない。でも、神崎だけは何か他の男達とは違つた。

確かにアヤカには本当に良くしてくれる。でもその目に下心があるようには見えない。アヤカだけではなく皆にやさしいし、いつも笑顔でお客様にもとても親切なのだ。そういえば、アヤカは神崎が怒つているのを一度も見た事が無い。

「本当にね、今日はどうしちゃつたのかしら」とアヤカは応えた。
「こんなに働かされた日は飲まなきゃやつてられないよ！今日、帰りどつかによつて行かない？」

神崎が本気で愚痴つていらない事くらいアヤカには分かつている。神

崎はそんな男ではない。

最近神崎とはたまに食事を共にするまでの仲になつた。仲と書いても男女の仲ではない。仲良しの同僚としてアヤカはたまに神崎に誘われる事があつた。

「いいわよ、じゃあ帰りは駅で待ち合わせね」

「オッケー」

神崎と食事を終えて帰宅途中、後もう少しでアヤカのアパートだという時、誰かの視線をアヤカは背中に感じた。アヤカは振り向いた。だがそこには誰もいなかつた。

『今のは何？確かに誰かの気配を感じたのに…もしかしてストーカー？やっぱり神崎さんの申し出を断るべきではなかつたのかも…』神崎は家まで送ると言つてくれたのだが、アヤカが神崎を気遣い申し出を断つたのだ。

アヤカは急いでアパートに入つて行つた。

その夜アヤカはなぜだか分からぬが、なかなか寝付く事が出来なかつた。照明は付けずにベッドから起き上がつたアヤカは、目を凝らし時計を見た。その針は午前三時を過ぎた所を指していた。外の空気が吸いたくなり、窓を開けるためカーテンを少し引いた。何気なしに見た外の光景にアヤカの目がある所で止まつてしまつた。初めは暗くてよく見えなかつたが、目が慣れてくるとだんだんとその光景が何なのか見えてきたのだ。「はあっ！？」アヤカは驚きのあまり声を出していた。そこには、人だろうか…アヤカにも良くわからぬ人が子供に見えた。大人にしては小さすぎる。三人？いやよく見ると五人はいるだろう。こんな時間にアヤカのアパートの前になぜ子供達がいるのか？それだけではない、その服装だ。皆がそろつて奇妙な格好をしていたのだ。全身黒ずくめに、目にはメガネよりもっと大きな何かをかけていたのだ。アヤカは恐怖を感じた。なぜならその者達は皆横一列になつてアヤカの方を見ていていたのだ…！『何なのっ！？』アヤカは夢を見ていると思つたかった。それほ

どその光景は異常だつたのだ。

アヤカはすぐにカーテンを引き、ベッドに潜り込み、頭から布団をかぶりながらその異常な光景に震えが止まらなかつた。しかし、いつの間にかアヤカは深い眠りについていた。

アヤカは夢を見た。

血だらけの男が何かを叫んでいる！『生きるんだ！生きるんだ！！』そして気が付けばアヤカは逃げていた。必死に何かから逃げていた。そして立ち止まって自分の手に握られている物が見えた。それは血がこびり付いたナイフだつた。

『これは何なの！！？いや！！！』

「ハア、ハア、ハア、ハア」アヤカは目を覚ました。その体は震えていた。『私は一体どうしたつていうの！？』

とにかく落ち着きたかった。昨夜見た事、夢の事、全て忘れたかった。アヤカは熱いシャワーを浴びる為、バスルームへ向かつた。シャワーを浴び終えた頃には少し落ち着いてきた。

『そうよ、きっとあれも夢だつたのよ。そうよ……そうよ……』まるで呪文のように自分に言い聞かせていた。

しかし、何かが動き出している事など、アヤカには知る由もなかつた。

第4話

その日の日曜日は晴れ渡ったとても気持ちの良い日だつた。アヤカは午後から由美と久しぶりにショッピングなどを楽しむ予定を立てていたので、午前中の内に洗濯や掃除らを終わらす為に忙しくしていた。

その時、アヤカの携帯電話が鳴つた。由美からだつた。

「アヤカ！『ごめん！』今日無理になつちゃつた！この埋め合わせは必ずするから『ごめんね』！」

「うん。わかつた。いいよ、気にしないで！」

正直アヤカはがつかりした。この間の出来事と夢のせいで気分が落ち込んでいるのだ。あれから変わつた出来事は今の所ないが、やはり嫌な気分は消える事はないし、十分に用心するようになつた。護身用にスタンガンも通信販売で購入済みだ。届くのは何日か先になるが。

アヤカは驚いた。スタンガンというともつと大きな物を想像していつたが、思つたよりもコンパクトな物が沢山あるのだ。アヤカは手のひらにすっぽりと収まるタイプを購入した。

「さてと…今日は何をしようかな…」

家に閉じこもつてゐるのは余りにも勿体無いほどの気持ち良い日だつた。

でもアヤカは一人で出かけるのはあまり好きではない。とにかく声をかけられるからだ。ナンパはもちろんの事、タレントのスカウトや夜のお仕事のスカウト、時にはファッショング雑誌のカメラマンから勝手に写真を取られたりする事もある。誰かと歩いていても同じ事だが、一人で声をかけられるより誰かが一緒にの方が心強い。

『やつぱり今日は家で過ごそつ』

そんな事を考えていると、突然携帯電話が鳴り出した。

「由美かな…？」

しかし表示する名前は見た事の無い番号だった。無視をするべきか悩んだが、アヤカは電話に応じる事にした。

「はい、もしもし…」

「あつ、あの、すみませんが、これは、春田さんの携帯番号で合っていますよね」

「そうですが……どちらまでですか?」

「あの、俺、神崎だけどアヤカちゃん?」

「びっくりした! 神崎さん! ? どうやってこの番号わかつたの?」

アヤカは驚いた。神崎とはもう何度も食事を共にしているが、いつも仕事帰りということで電話がかかってきた事など無かつたからだ。

『でも… どうやつて? 私、教えたかしら…』

アヤカの携帯番号は由美以外誰も知らないはずだ。

「まあ~、俺にはわからない事は無いんだよ~」 神崎はそう言つたが、アヤカにははぐらかした様に感じた。

「アヤカちゃん、今日、時間ある? もし良かつたら映画でもいいかない?」

断る理由はアヤカにはもちろんなかつた。

映画の後、二人はある高級レストランの個室にいた。神崎が予約を入れていたようだが、正直アヤカは戸惑っていた。レストランでの神崎の振る舞いはまるで常連のようであり、レストランのマネージャーと言う男がわざわざ神崎に挨拶に来たのだ。そして、このレストランのメニューはどれもこれもかなりの高額だといつとくらいうアヤカにもわかる。

デパート勤めとはいって、おもちゃ売り場の従業員の給料ではとてもじゃないけどこんな高級レストランにそう来られるはずはない。いつもアヤカと一緒に行く所は、居酒屋とかそういうような所だ。しかし、どう見ても神崎はかなりの回数でここに通っているよう見える。

「アヤカちゃん、何でも好きな物食べてよ。遠慮はしない事!」

アヤカの胸には疑問が残つたが、今は言われる通り御馳走になろう。この場の雰囲気を壊したくなかったのだ。そのような事を考えていると突然神崎が口を開いた。

「俺の給料なんかで大丈夫かつて心配しているんだろ？心配なんてしなくて良いから。金ならあるんだ、親父の金だけどね。悪いけどこれ以上はもう言いたくないんだ。」

アヤカは見逃さなかつた。そのように語る神崎の目は悲しみに溢れていた。

神崎はいつも明るく笑顔だ。機嫌の悪い所なんて見た事が無い。でも…本当は神崎も心は泣いているのかも知れない。人間とはそんなものだ。どんなに苦しい事があつても悲しい事があつても結局は生きて行かなければいけないのだ。

「アヤカちゃん…？」

気が付けば神崎がアヤカの事を見つめていた。アヤカは胸が高鳴るのを感じた。なぜなら神崎のアヤカを見つめるまなざしはいつもとは確実に違つっていたのだ。

「アヤカちゃん、俺は、君の事が好きだ。でも、その気持ちは簡単に言葉で言えるものじゃないんだ。君は俺にとつて、本当にかけがえの無い失いたくない存在なんだ。だから、君を困らせるつもりもないし、何かを望んでいる訳でもないんだ。ただ傍にいて君を守りたいんだ。」

「神崎さん…私…」

「ははは、『ごめんね、突然驚いただろ？どうしても一度でいいから俺の気持ちを伝えたかった。いいんだ、今言つた事は忘れてくれても。』

ちょうどその時料理が運ばれてきたのでその話はそれっきりになつた。

帰りは神崎が送つてくれると言つ申し出を素直に受けた事にした。

「神崎さん、今日は本当に楽しかつたわ。有難う。それと…私、今は正直恋愛とかよくわからないの…でも、神崎さんの事は私もとて

も大切に思つてゐるの。あの…上手く言えないんだけど、これからも仲良くしてほしいの。」

「もちろん!! アヤカちゃん…有難う。」

神埼は嬉しそうだつた。それを見たアヤカもとても嬉しかつた。

バスタブに浸かりながら、アヤカは神埼の事を考えていた。

『恋愛か…神埼さんなら幸せにしてくれるんだろうな…』

今までの男の人達に告白された時の気持ちとは明らかに違つていた。アヤカは今十分に幸せだつた。

アヤカには10歳から以前の記憶が全く無い。自分が本当は何者で、親はどうしてアヤカを捨てたのか、『アヤカは親に捨てられたと思つていて』 一体自分の身に何が起こつたのか何一つ分からない。そしてこの間の奇妙な出来事、あれは何だつたのか…

それと… 一体神埼のお父様とはどんな人物なのだろう。分かつた事は神埼が相当なお金持ちの家の息子らしい事だ。でも、それならなぜ、神埼はおもちゃ売り場なんかで働いているのだろう。分からぬ事だらけだ…

しかし、今のアヤカにはそんな事はどうでも良くなつていてた。

今日レストランで聞いた神埼の言葉だけがアヤカの耳に優しく響いていた。

第5話

今、アヤカはジャックに来ていた。由美から電話があり話したい事があるという。時計の針は午後8時を過ぎていた。

『遅いなー由美つたら…7時半頃には来れるって言っていたのに…』

「彼女遅いですね」

突然ジャックのオーナーに話しかけられ、アヤカはびっくりした。アヤカは彼に話かけられたことなど一度もなかつたからだ。由美は彼の事がお気に入りという事で、何かにつけ彼に話かけていたが、いつも彼はただ頷くだけだった。由美からすればそんな無口さも素敵なのだそうだ。

『なんて素敵なお嬢さん…でも、びっくりした。彼は話が出来るのね』

あまりにも無口なのでもしかしたら日本語が話せないのかと思つたほどだ。

『こうして見ると本当に素敵なお嬢さんだわ…』

「彼女、7時半頃までには来れるって言つていたのに…どうしたのかしら…」

「電話、してみたら？」

アヤカはまだびっくりした。『この人は、由美の事が心配なのかしら…もしかして、由美のこと気に入っているのかな?』

「そうね、ちょうど私もそう考えていた所だから。』

そしてアヤカは携帯電話をバッグから取り出し、由美の携帯にかけてみた。

『えつっ！？』アヤカは焦った。

『そんなん…この番号は現在使われておりませんって…どういう事？…そんなはずはない。もし事情があつて番号を変えるような事があつても、アヤカに知らせないはずが無い。』

『アヤカさん、彼女の身に何があったのかもしませんね。彼女の

家に行つてみましょう』

彼が突然アヤカの名前を口にしたのは驚いた。でもそれは由美との会話を聞いてれば私の名前は知る事はできる。しかしそれよりも驚いたのは彼が由美の家に行こうと言っているのだ。どうしてただの常連客の家に行こうなんて言つのか。

『早くしましょう』そう言つて彼は店から出て行こうとしているところだった。

『えっ！？あの、お店の事は…』アヤカが言い終わらない内に彼はもう外に出でていた。

そしていつの間にか店の前に車が止まっていた。彼の車らしい。彼は助手席のドアを開けながら「早く乗つて下さい」と言つて、自分は運転席の方へ乗り込んだ。

『何の車だらう…何か凄く高そう…動いているのに、車つてこんなに静かなものなのかな…』

車の事は全く分からぬアヤカでも何となくすごい車だという事はわかつた。

アヤカはもう何が何だか分からなかつた。ただ分かる事は彼が由美の家がどこなのか知つてゐるらしいと言う事だ。『私に内緒で付き合つていたのかな…？それよりも、由美、何も無いよね？大丈夫だよね？』

いつの間にか一人は由美のマンションの前にたどり着いていた。綺麗なマンションだ。アヤカのアパートとはえらく違う。

二人は由美の部屋の前まで來た。

アヤカがチャイムをならそととした時、彼は構わずドアノブに手をかけていた。『ガチャツ』

『開いた…』思わず声が出た。そして一人は部屋の中へ入つて行つた。

今、アヤカは彼の運転で自分のアパートの前に来ていた。彼が送つてくれたのだ。

「あの……どうもありがとうございました……」

「仁」

「えっ！？」

「私の名前は仁。そう呼んで下さい。アヤカさん。」

「仁……さん……」

「仁でいい。アヤカさんは何も心配しないで。私にまかせて下さい。これは私の電話番号です。何かあつたらすぐに掛けて下さい。必ずです。あなたは何も心配せず今夜はゆっくり休んで下さい。」

そう言って、仁はアヤカが部屋に入るまで見守ってくれていた。アヤカは疲れていた。『どうして……由美、何があったの！？』アヤカには訳が分からなかつた。そして、仁という男の事も……彼は何か知つているのではないか……そんな思いがアヤカの脳裏を過ぎつた。由美の部屋には何もなかつたのだ……何も……

何かが動き出している、何かが……アヤカは夢の中でそつそつとやっていた。

アヤカは今日とても疲れていた。昨夜は一睡も眠れなかつたのだ。
『由美…』アヤカは由美が何も言わず消えてしまつた事が信じられないでいる。由美とは高校生の時、学校で知り合つて以来唯一アヤカが心から信じられる人間だつた。そして、由美もそうだと思つていたのだ。絶対何か事情がある。アヤカは由美が何か事件に巻き込まれたのかもしれないと考えていた。何とかしなくては…。アヤカが施設を出た時、由美はもうすでに一人暮らしをしていた。その時は何か事情があつてとだけ聞いていたのだが、由美の父親が原因だと後で由美が教えてくれた。その父親3年前に亡くなつている。そして由美には母親はいない。頼れる親類も誰もいないのだ。

警察に連絡しようと言つたアヤカを仁は激しく止めていた。そして自分を信じろと言つっていた。『なぜ！？仁は何か知つているのよ、絶対』

『仁…彼はただのマスターではないのかもしれない…何なの、一体なにが起こつてているの！？』

そして、あの晩のアヤカが見たものは一体…

アヤカは警察に言つべきか悩んでいたが、どうせアヤカの見た事は誰も信じてくれないだろう、そう思つていた。

「アヤカちゃん！」

そう考え事をしている時、突然誰かがアヤカの名前を呼んだ。

「アヤカちゃん、どうしたの？ 考え込んじゃつて…大丈夫？」

神崎だつた。神崎は爽やかな笑顔でアヤカの顔を覗き込んでいた。

「あつ…神崎さん今日はお休みじやなかつたっけ？」

神崎は何か用事があつて今日休暇を取つていたはずなのだ。
びっくりしたアヤカはもつとまともな考え方をすれば良かつたと、少し後悔した。

「そりなんだけど、思ったより用事が早く終わつてね、それにアヤ

力ちゃんの顔を一日でも見ないと何だか調子がでないんだ。」 そう

言つて神崎は軽くウインクしてアヤカの頭をポンポンと撫でた。

アヤカは神崎に会えて嬉しかった。今日は神崎に会えないと思つていた分、余計に嬉しかった。

『苦しい…何だか胸が苦しい…神崎さんに会えてとっても嬉しいはずなのに、私、どうしちゃったのかしら…』

アヤカは自分の心の変化に戸惑っていた。

『私…彼の事が好きなのかな…』 アヤカは彼に惹かれていついる事に気付き始めていた。

「アヤカちゃん、もうすぐ上がる時間だろ？飯食いに行こうよ、待つてるからさ！」

「うん、わかったわ」

二人はいつものように居酒屋に来ていた。神崎はこの間の高級レストランに行こうと言つてくれたのだが、アヤカはこっちの方が気が楽だったのだ。

二人はいつものように他愛の無い話をしていた。

「良かつた、アヤカちゃん、もう俺と話してくれなかつたらどうしようかと思つてたんだ。あんな事を突然言つてしまつたからね。君を困らせたんじゃないかと気になつていたんだ。」

「そんなん…神崎さんにあんな事を言われて嫌になる女性なんていいと思うわ…」

アヤカは不思議だった。なぜ神崎に彼女がないのか…実際、アヤカは神崎の事を2年近く知つているが、彼女がいたのを見た事がない。

「そう言つてくれると嬉しいよ。アヤカちゃん、俺は君の事が本当に大切なんだ、俺で良かつたらいつでも君の力になりたいんだ。」

アヤカは嬉しかった。アヤカの事を大切だと言つてくれる…そんな人がいる事にアヤカは幸せを感じていた。

『彼に話してみようか…彼ならきっと信じてくれる』

「あのね、聞いてほしい事があるの…」

アヤカがそう話始めた時、誰かがアヤカを呼んだのだ。

「アヤカさん！」

「仁だった。

「仁さん、何でここに？どうしたんですか？」

「さあ、行きましょう」

そう言って、仁は突然アヤカの腕を取り表へ連れて行つたのだ。

「仁さん！！突然何をするの？私、一人じゃなかつたのよ！？」

「知っていますよ、ちゃんとね。あなたは彼に何を言おうとしていたんですか？忠告しておきます。誰も信じてはいけません。あなたは彼の事を何も知らない、彼はあなたが思つてているような人間ではない」

「どういう事！？あなたに彼の何が分かるって言うの？あなたの方こそ信用できません！こんな…こんな突然現れて…まさか…私の後を付けていたの！…！」

「彼を信用してはいけない」仁はまるで機械のように言い続けた。「ひどい言われようだな、これはこれはライバルが現れたという事かな？アヤカちゃんほどの女性ならそれも覚悟はしていたけれど、こんなふうに言われちゃなー俺も黙つていられないね！」

神崎の口調はおどけている様に聞こえた。だがその目は仁がたじろぐ程の迫力ある目で仁を見据えていた。

「アヤカさん、今夜は失礼しますよ。だが、さつき私が言った事は忘れないようにして下さい」

そして仁は神崎にこう言つて静かに去つていった。「あなたとはまた会う事になりそうですね。」

神崎の運転する車の中で、アヤカと神崎は何も語りうとはしなかつた。アヤカのアパートが近づいてきた時、神崎がようやく口を開いた。

「アヤカちゃん、俺を信じてくれ。何があつても俺が君を守る。俺は君の事を心から愛しているんだ…」そう語る神崎の顔は何かに苦

しんでいるかのようだつた。

「神崎さん…私もあなたの事が好きです。でも、私は不安なの、今色々な事に本当に不安なの…」そう言つてアヤカの目からは耐えられなくなつた涙がとめどなく流れた。

「アヤカちゃん!!俺を信じてくれ!必ず君を守る。君は一人じゃない!君には俺がいる。

アヤカ…アヤカ…」

そう言いながら神崎はアヤカを力のかぎり抱きしめた。

神崎はアヤカを部屋の前まで送ると言つて一緒に車から降りて來た。

「アヤカちゃん、何かあつたらすぐに俺に連絡するんだ!わかつたね!?」神崎は少しきつい口調でアヤカにそう言つた後、

「何なら今夜君の所に止まつても良いけど?いつそのこと一緒に住んじゃおうよ!?」とふざけた口調で神崎はアヤカの肩を抱いた。

「神崎さん!!ふざけないで!!」

「ははは、ごめん!冗談だつて!」

アヤカは分かつていた。神崎はわざとアヤカの気持ちを和ませようとしているのだ。

神崎は本当にアヤカ事心配してくれている。アヤカはなぜだか分からぬが、心から神崎を信じられる気がした。神崎といふと不思議と心が安らぐのだ。何だか懐かしい気持ちにさせられる。

「神崎さん、あのね…話したい事があるの…」

そうアヤカが口を開いた時、

「キイイイイー!!」

という音と共に一台の車がアヤカと神崎めがけて突っ込んできたのだ!!!!

「危ない!!!!」神崎がアヤカをかばう形で二人は道の端へと転がつた。

そしてその車はそのまま走り去つてしまつた。

「大丈夫か!?」「ええ…大丈夫みたい…」

神埼はアヤカの安全を確認すると車が走り去った暗闇へと激しく視線を送っていた。

「ちつ！動き出したか…」

アヤカの事を心配した神埼が、今日は別の所へ泊まった方がいいと言つたが、アヤカはどこにも行く気にはなれなかつた。何かあればすぐに連絡すると言い聞かせ、それでも渋る神埼を半ば強引に帰したのだ。

アヤカは一人になりたかつた。

『あの車、わざと私達に向かつて來たわ…なぜなの…私達？…いえ、

私に向かつて來たわ！

彼がいなかつたら今頃……』アヤカは震えていた。

そして、アヤカは聞き逃さなかつた。

『ちつ！動き出したか…』そう呟いた神埼の言葉を…

アヤカは目に見えぬ恐怖に怯えていた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4034e/>

満月の夜

2010年10月10日18時59分発行